

水鏡に映る恋の色

CONTENTS

暮れた蒼、暮れる風.....	3
あなたの一番になりたい.....	49
隣に続く坂道.....	79
麗らかな風、一夜の契り・改.....	141

登場人物紹介

・ 特艦シリーズ

浦風

陽炎型艀装に適合した艦娘。同型艦の磯風とは候補生時代からの同期。駆逐艦たちの中で年長として頼られる存在。

磯風

浦風の同期。常に強くなるための努力を惜しまず、武人然としたストイックな性格。大口に見合うだけの戦闘能力を持っている。

金剛

浦風の実姉。艀装の適合資質を軍に見出され、浦風より先に艦娘となった。口調が変わり、性格も陽気になったとは浦風の談。

暁

〴〵特艦、に配属されたばかりの最年少の艦娘。提督を兄のように慕い、浦風に対して対抗意識を燃やしている。独占欲が強い。

如月

〴〵睦月型、の艦娘の一人。歳は暁と大差ないが、〴〵特艦、設立時から所属している古株。小悪魔的な性格で、イタズラ癖を持つ。

提督（特殊艦娘実験艦隊所属）

〴〵特艦、が配属する基地の司令であり、艦娘たちを取りまとめる提督の青年。彼の命令で所属する艦娘は揃って『提督』と呼ぶ。口下手であり、艦娘に干渉しないよう気を遣っている。

・ 番外シリーズ

秋津洲

利益供与の産物と評される〴〵秋津洲型、に適合した艦娘。強い自分になることを望んで軍に所属するが、理想との乖離^{かいはり}に悩む。

秋津洲の提督

秋津洲が憧れを抱く青年。落ち着いた印象をもたらす風貌と性格だが、親しい人には饒舌。実家は喫茶店で、特技はお茶淹れ。

暮れた蒼、
暮れる風



提督さん、いつもおつかれじゃね——

まどろんでいた意識の中。不意の聲が耳朶を打ち、提督と呼ばれた青年は思わずハッと声を漏らす。

どのくらい寝ていただろうか？ 覚えている限りでは昼休み前ににぎり飯を喉に詰め込んだあと、基地に所属している艦娘の情報に目を通していた最中だった。

「寝とったじゃろ？ この基地のボスともあるうお方が、のんきにうたた寝と洒落込むなんて、大層呑気な様子じゃて」

袖をまくったセーラー服の下にある白い肌が、陽の光に反射して提督の目を焦がす。スタイルのいい彼女の肢体は、目覚めにしては強い刺激だ。秘書を務める彼女の前で寝てしまったことを内心で戒め、自らの頬を軽く叩く。

『提督』。それは海軍において「艦娘」と呼ばれる少女を率いる、最高責任者となる者の敬称だ。この離島の基地に配置された『艦隊』——軍艦によるそれではなく、艦娘のみで編成された部隊を指す——をまとめる男であった。

「浦風……ごめん、謝る」

笑顔の皮肉を耳にして、青年は目を合わせて彼女の名を呼ぶ。

空色の髪が眩しいこの女、浦風は、親しげに「気にせんというて、提督さん」と呼ぶ。

彼女は艦娘と呼ばれる戦士の一人だった。

駆逐艦の艦娘「浦風」。かつてあった戦争で奮闘した、この国の軍艦の名を冠する彼女は、誰に対しても人懐っこく接してくる。だから、提督などと大層な階級を持ってしまった男に對しても飄々と彼女は話しかけていた。

「ちよっと夜通しのしわ寄せ。三時間程度しか寝てない……なんて、言い訳にもならないよな」「ふふっ」

癖のある髪を掻き上げながら、提督は寝ぼけ眼をこすりつつ浦風に返した。

「……やけに笑顔だな？ 浦風」

ふと提督はニヤニヤした様子でいる浦風に問う。自分がうたた寝したとは言え、そんなに面白いことなのか？ それとも机に顔をはり付けていたせいで、変な顔にでもなっているのか。

「べえつつにいー。ただなっ、提督さんのふらふらとした頭の動きとその寝ぼけ顔が大層可愛らしゅう見えただけじゃ」

その答えに安堵しつつ、

「お前が働いてるのに、のんきしていたことは謝るよ。けどな、俺の顔なんて見ても面白くないだろ。第一、ほけーっとしてゐる俺なんて、見て得かよ」

と、ため息を吐きつつ返す。照れ隠しも込めた言葉だった。

「まあ、弱みを握れたってぐらいには？ 寝ようたことは、昼休みも働いとったし、大目に見とく。……しっかし、昨日も夜中まで書類の山に目を通すとは、まったくもって大したことし

よつてからに。少なくともウチの手にはあまつてもうておえれんわ」

本日の秘書艦——秘書艦とは日替わりで変わる提督の秘書係を指す——は、浦風。名の通り提督の補佐をする艦娘の代表者であり、当直勤務の一つだ。定期的な報告作業と、深海棲艦が出てきた時には即応性を要される役割でもあるため、決して楽な役回りではない。だが彼女は軽口をたたきながらも手早く済ませていたため、提督と喋ることぐらいいしか暇を潰せるものがないのだろう。仕事を回そうにも後残っているのは提督本人がしなければならぬことばかり。

「あのまま寝ようてくれりゃあ、写真の一つでも撮ろうかと思つとうたよ」

「別に肖像権で訴えたりはしないが、お前が俺の写真持つてるなんてこと、万が一青葉あたり知られてみる。熱愛報道ばりに大騒ぎにしかねん」

「ほう？ 提督さんはこの浦風とお熱いような記事が流れたら困ることがあるん？ ウチが提督の女と認知されれば、それはそれで面白そうじゃね」

「俺は面白い」

艦娘は待遇自体は士官相当だが、実質の扱いは軍の最下層である下士官とほとんど変わらない。ただ命令する人間が下士官のそれより偉いだけで、私生活も基地内の隊舎と定められている。例外的に、婚姻した艦娘は営外での生活が許される規則が存在するので、浦風の冗談はそれと絡めているのだ。

「詐称はご法度だ。外出禁止、食らわせるぞ」

滅らない浦風の言葉に肩をすくめておどけてみせる提督。

いい度胸している女だ、とは思う。上司と部下のやりとりで、今の流れは本来ありえない。

だが、不思議と苛立ちはない。これも彼女のその飄々さを含みも嫌味もないからだ。

提督は小さく息を吐き、人懐っこい浦風を見て笑う。

『もう一年も経つのか』と内心で呟く。提督は浦風と出会って間もない頃を思い出し、過去の光景を頭の中に描いた。

彼女との馴れ初めは、他部隊と実施した沖ノ島沖合同攻略作戦の時だった。先遣隊として自艦隊が先に海域を哨戒していた際、艦娘の一人が不自然な漂着物を発見したのだ。

それは島の周辺海域を漂っていた『民間人だった頃の浦風』だった。近海の船の事故により投げ出された彼女は大きな怪我もなく、奇跡的な生存を果たしていた。救出された後、軍が行なった身体検査で艦娘になれる適合性が発覚し、彼女は「浦風」と名を改めて、海軍に所属することとなったのだ。

浦風は全国にいる艦娘の中でも特に適合者が少ないとされている陽炎型の一人。その特異性と、練度もままならない彼女では他の部隊に編入したとしても運用に支障が出ると司令部に判断され、ここ提督のいる基地……特殊艦娘実験艦隊、通称「特艦」に所属することとなったのだ。一年間艦娘として勤務してきたとはいえ、ここは裏方の艦隊だ。浦風はまだまだ実戦でも業

務でも経験が浅い。浦風は報告によると、シミュレーションや演習での成績は良いようだが、実際の航行時間は通算で高々数週間程度のものだ。

だが、経験は浅くとも。しっかりと仕事をこなすのが浦風という女だった。紛れもなく彼女は優秀と表されるにふさわしい存在である。戦いならば、駆逐艦である自分を十分に理解した上での立ち回りを意識し、敵機を翻弄する姿。基地の実務ならば基地勤務をしつかりと行なう姿。働く時以外では基地の同期や後輩を纏め上げて、面倒を見るといった姿。

それらの姿が提督の知る浦風だった。

そこまで思い返していたところで急に浦風の声が聞こえて、提督は現実に戻される。

「そういえば最近、ちゃんとご飯は食べよるん？」

「レトルトカレーとインスタントラーメンが交互で家のテーブルに鎮座してくれている。たまに牛丼とハヤシも応援に来てくれるぞ。いやーメニューは尽きないな」

「偏りが酷いわッ！ そんなあつためるだけの袋詰め、全部料理とは言わんッ！」

彼女は半笑いになりながら怒鳴り散らし、堪らず提督は耳をふさいでしまった。

そしてこの浦風、優等生だからなのか何かと他人の世話を焼きたがる。上司である提督に対しても遠慮なく、だ。決まって彼女は口酸っぱく提督の生活の乱れを指摘し、疲れを見抜かれた時には力づくでも休ませようとしてきたこともある。具体的には、書類を隠してしまったり、

机で寝ているところを起こされて既に毛布を用意した仮眠室に向けて背中を押されたりとだ。

提督は浦風の行為が迷惑とは思わない。むしろ感謝しているぐらいだ。

仕事を奪いに来る時も、書類の把握や承認の押印ぐらいの単純作業を残すばかり。浦風は提督の働きを常にチェックしているからこそ、狙いすましたタイミングで休みを勧めるのだ。

——だが何時までも浦風にペースを握られっぱなしというのも癪に障る！

仮にも提督だ。この基地のボスだ。男児たるものか弱い女の子に主導権を握られてはむしろ痒い思いではない。

「なあにさつきからブツブツいっとるん、提督さん、怪しいつぶやきは見過ごせんね」

「口に出していたか……」

「ウチが提督さんを気遣うのが気に入らんの？」

判断を誤った、と提督は思う。

彼女の前でうかつに中途半端なことは言えない。なぜならその全てを暴かれるまで追求されるからだ。曰く、隠し事はしてほしくないとか。

「さあ、何か言いたいことがあるんなら聞いちゃる。この耳に一語一句聞かせてもらうまでこの浦風、退く気はないけんね」

「今決めた。機密事項だ。もう口にしなからな」

「おいそれとつぶやけるものが、そがあな大層なものなわけないじゃろ」

面倒くさい事態になった、と思った。

なにせ秘書艦は四六時中提督のそばにいろような仕事なのだから、一日中執務室にこもれるのだ。

自分が散歩にでも外に出ようものなら、執務室に置いてけぼりになることもなく、彼女もひつついてくることが出来る。提督をサポート・ジュ監視するのも、元々秘書艦の役割の一つなのだから。

とどのつまり浦風は、次の当直交代となる時間まで提督を問い詰めることが可能だ。無論、黙っていることも出来るのだが……頑固なのだ、彼女は。提督がかなわないくらい。

「分かった。白状する。俺は提督だ。ボスの立場なのに駆逐艦の女の子に言い負かされている今が堪らなく悔しい」

「はあ」

淡々とわざと抑揚も付けずに並び立てる。別に怒っているわけじゃない。ただただ、観念するのように口になっているつもりだ。

「そうは言うてもなあ。提督さんの仕事を助けるのがウチら秘書艦の役割じゃし、そぎゃあに言う提督さんのほうが普通おかしいよ。おとなしゅう、ウチの助けに身をまかせんさい」

「それが悔しいと言っているんだ……考えても見ろ、大の男の俺が歳下の女の子に好きのままにされている。お前の苦勞を増やしても迷惑だら」

「別に……まあ提督さんはウチからすればあまり歳の離れていない兄貴みたいなもんじゃし」
平然と言つてのける。そうも親しげに話しかけられては、示しがつかないのだが。

「兄貴、か」

「ウチは姉はいたけど、小さい頃外国の方に行つたけえね……提督さんのような人はホント新鮮」

こと浦風には親しげに接されるのは個人的には悪くない。だが、それではダメなのだと考える。

艦娘と親しすぎる立場になれば、任務に支障が出る可能性がある。

提督は艦娘に対し、いつでも非情になれなければならない。

その為に彼女との間に一線を引いているつもりなのだ。

なのにこの少女ときたら、そんなの構わないと言わんばかりにつきまとってくる。それが悩みのタネの一つではあった。

「ウチは誰かの世話を焼くんがとっても大好き。提督さんのように重荷を背負わされている人なんか、ぜひとも助けたくてしょうがないんよ。今更ウチと提督さんの仲じやる？ だから提督さん。そんなこと言わずにやることも終わればウチと仲良く今日は過ごそうに」

「嫌だ」

「なんでよ」

だが彼女との距離を置くのは、極めて個人的な理由もある。

「恥ずかしい、悔しい、照れくさい」

これに尽きた。どれだけ言葉を並べたり、建前を取り繕ったりするのは正直な話、一人の男として浦風に世話される事が恥ずかしく感じてくるからだ。

浦風は提督にできないことをできる人間なものだから、今まで感じることもなかった『何にもできない自分がある』事を実感してしまう。

「急な三連発の反論にはウチもとっさの返しが思いつかんわ……提督さん、結構隠さずにいーんやね……普通そこら辺恥の一環として躊躇するじゃろ」

「お前の前では隠し事できないなら、言うしか無いだろ。隠して暴かれるのは負けた気がする」
「素直じゃないね」

浦風が呆れたように言う。内申を隠すため、提督は大仰に両手を広げて返した。

「素直じゃないし、強情さ。意地っ張りだからな、俺」

だから浦風、今日の俺は極力お前に頼らないぞ。

そう伝え、再び席の書類に目を通す。

その書類には、明日からの大規模作戦に参加予定の艦娘達のデータをまとめた情報があった。主な内容は体調面などの身体に関する情報と機装ステータスだ。

提督たちが所属する、特艦は行き場の無い艦娘の溜まり場であり、受け皿である。

通常艦隊での運用にしても、艦装の能力にしても、大本営から不安要素を睨まれた艦娘は本州から離れた孤島に設立されたこの基地に集う。

故に大人数の艦娘の所屬が想定されず、大規模の整備施設を持たない。そのためこの基地に所屬する艦娘は、数えて高々数十人程度だ。

そして業務も大したものは降りてこない。時折来る新兵装のテストの日以外は比較的落ち着いた毎日である。暇とも言える。

つまり、別に浦風を当てにしくとも提督が少々 of 残業を重ねれば執務室で行える仕事は終わる。その重ねた残業の疲れでうたた寝してしまったのだが、意地を張る提督にはその考えが頭から見事に抜けていた。

「そんな肩肘張ってないで、ウチにもっとたよりいよ。提督さん、ウチが寝ている間にも前々からずっと仕事を明け方まで続けてたでしょ？ だったら仮眠兼ねて執務の交代をウチとすればええ。なんなら、茶菓子でも食べながらそこでくつろいでてもええで。お気に入りのお茶、急須と一緒に部屋から持ってきたし」

「イヤイヤまでまで待ちなさい。お前は茶屋を営む世話焼きのおばちゃんか」

浦風は心底呆れた様子で提督に語りかける。対し、掌を突き出して提督は首を横に振った。

「提督さん、そこは喫茶店の美人なお姉ちゃんと呼んでほしいものじゃね。ついでに言うなら嫁いだばかりの幼妻でもええ。ウチが提督さんの嫁なら、提督さんの疲れ、とれるだけウチが

「勞っちゃうし？」

「そんな絶滅危惧種がそうそういるものかなあ」

「ここにおるやん。つっけんどんやな、提督さんは……それはそうと、現に提督さんはさつきも眠たそうにしとったじゃろ？」

「それはそうかもだが……！」

否定の応酬が続き、段々と声が大きくなる。

今の提督は疲れていた。

秘書艦に生活の乱れによる不注意を咎められるのは筋が通る。見抜かれるほど彼女から見たら今の提督は疲れが顔に出ているのだらう。

だが、どうも浦風に言われるのは納得いかない。何でもかんでも彼女の言葉通りだったら、まるで本当に自分が何もできないダメ男みたいではないか。

彼女の言葉を聞いてしまっただけとはいけないという意地が、提督の態度を変えずにいた。

「絶対に、嫌だ。俺が怠けてたらメンツが丸つぶれだ。ここで頑張らなきゃ人の上に立つものとして相応しく無い」

「ええんよ！ そんなんきにせんでも……！ ほら……」

気恥ずかしさから目を背けていたが、それがまずかった。

「おい——」

ほんのりと漂う甘い香りが鼻孔を打った。

気付けば浦風は提督の目の前にまで迫り、腕を広げた後で提督を胸元に抱き寄せていた。唯でさえ強いまどろみが加速するようだった。

「心配いらんよ。誰も提督さんのことをバカにしたりしやらんし、ウチもバカにせん。誰にも言わんし、誰にも提督さんをバカにさせへん。だからさ、ウチをもっとたよりね？ 提督さんの執務、これまでに何度手伝ったとおもうてるん？ 桁数だつてとつくに増えとるんよ。提督さんの考えだつてある程度わかるし、今は休んでくれへん？」

引き離そうかと思つたが、駄目だ。案外艦娘の力というものは強いもので、簡単には振り払えそうにない。それでも本気で抵抗すれば流石の浦風も手放してくれるだろうが……厄介なことに、その抵抗する気力さえも彼女の甘い声と身体で奪われる。

「こういうの何ていうんだ……？ かかあ天下つてやつか」

「いわゆる死語やね。それって夫婦の間で使う言葉じゃないん？ とうか正しいん？ その使
い方」

「知らない。旧い言葉なんていくら考えてもわからんことばかりだ。……今回つきりだぞ」

「今回でも何回でもええ。ウチに頼るのに遠慮はなくていい。ゆつくりお休み。執務のメモは、いつもどおり机の中にあるん？」

「……次の作戦に向けた戦力の確認だ。書類に書かれている艦娘の身体と装備兵装の確認ぐら

い、だ。……お前が見て不足あれば起こしてくれた時に言ってくれればいい。俺がどうにかする」
「そんな簡単な事ぐらい。トップがやることじゃないよ。ウチみたいな下っ端を有効活用すればええ。ほら、仮眠室行って目え瞑り」

「助かる」

「お礼、嬉しいよ」

席を立ち、提督は導かれるまま仮眠室のベッドに入る。毛布まで掛けてもらい、まるで母親にあやされているような気分だった。

つい先程までの昂ぶっていた意識が静まる。彼女が部屋から出て、目を閉じた。まぶたの裏に映るのは、浦風の柔らかな笑み。それを眺めることがとても心地よく、提督の意識は瞬く間に闇の中にいざなわれてしまった。

気付けば三時間以上も寝てしまっていた。

空は朱に染まり、夕焼けが眩しくカーテンの間から差し込む。仮眠室のドアを避けて入り込んだ光線に提督は肌を照らされ、暑さを感じながら目を覚ました。

——浦風は……？

意識を失う間に触れられた頭に自らの手を重ねつつ、眠気を振り払う提督。部屋の時計を見た。時間オーバーもいいところだ。一時間を予定していたというのにこの体たらく。余裕で